

令和 7 年度埼玉県障害者施策推進協議会
第 1 回ワーキングチーム（A チーム）会議メモ

令和 7 年 7 月 15 日（火）
15 : 00-17 : 00
福祉部会議室

参加者：松本委員（リーダー）、万谷委員、白石委員、石橋委員、関根委員、神月委員、
欠 席：なし
他チーム参加者：下重委員（B チーム）
傍聴者：なし

次第 1 サブリーダーの選出について
石橋委員をサブリーダーに決定した。

次第 2 令和 7 年度のワーキングチーム（A チーム）の進め方について
松本委員）

令和 7 年度のワーキングチーム A チームが、何をどこまで議論していくのか、委員からの意見はどのように計画に反映されるのか等、ワーキングの進め方について伺えますか。

事務局）

そもそも、このワーキングチームの位置付け等について改めて振り返りをさせていただければと思います。

皆様に所属していただいているのが障害者施策推進協議会になりますが、県の附属機関ということで、皆様のご意見を取りまとめさせていただいて「提言」という形で県にご提出いただきます。その提言を埼玉県障害者支援計画に盛り込ませていただくという形の位置付けになっております

協議会委員は総勢 20 名いらっしゃいますが、その中で、どうしても 20 名の委員全員が集まって会議するとなると、スムーズに議論を深められないため、3 つのワーキングチームに分かれて、それぞれの分担テーマごとにご議論いただいているところです。

施策推進協議会から提言をいただきますが、それを全て障害者支援計画の施策に盛り込むことは難しい状況があります。

どうしても県の計画になることから、例えば実際にやったほうがいい取組があると皆様からいただいた提言について、どのような対応になるかということ、新たに事業化可能であるとか、すでに行っている事業をもう少し膨らませたら、皆様のご意見に沿える形になる、といったように提言を政策に寄せていく作業を行います。

そのため、令和 8 年度に実際に提言をいただくことに向けて、今後、県として皆様の御意見を提言として取りまとめる作業を進めてまいります。

具体的には、今年度末に向けて計画に盛り込むべき重点課題を絞り込んでいただき、最終的に、その中からどういった点を提言に掲載するかをワーキングチームとして話し合っていていただき、最後は会長の名前で施策推進協議会から提言を県にご提示いただくことになります。

そのため、今年度につきましては計画期間3年のうちの中間年ということもございますので、昨年度中に、実際第7期計画を策定された方たちから「ここが不足である」というご意見であったり、「もう少し深めたほうが良い」というご意見をまとめた資料としてお示ししているの、実際には同資料の内容を深めていただいたり、不足しているといった御意見を出していただいて、最終的にはその中から特に重要だと思われる点を絞り込んでいただくということが、中間年である今年度の位置付けと考えております。

それを最終的に令和8年度の前半でどの点を提言として取り上げるのか、全て提言として取り上げるのか、といった検討をしていただくこととなります。

ワーキングAチームにおいては、その点と合わせて、彩の国いろどりライブラリーという事業をどのように進めていくかといった点につちえ、ご助言いただければと思っております。

第7期計画を策定する際の提言が計画冊子127ページに掲載されております。

最終的には、令和8年度に同様の形で提言をまとめていただいて、県にご提出いただくというところが、障害者施策推進協議会の役割であり、提言の中身を決めるため議論を深めていただくのが、このワーキングチームの位置付けとなります。

以上となります。

松本委員)

ありがとうございます。

本題に入る前に万谷委員からご発言があると伺っております。

お願いいたします。

万谷委員)

お時間いただきありがとうございます。

障害者施策推進協議会委員として、福祉部障害者福祉推進課長及び障害者施策推進協議会会長あての要請文を読み上げます。

リフトつき大型バスおおぞら号の運行終了及び伊豆潮風館を廃止する件について、推進協議会の議題として早急に慎重審議をすることを要請します。

また審議にあたっては、障害当事者の意見生活実態を考慮し、事業への理解を求めます。

去る6月6日金曜日、第1回施策推進会議で、最後に連絡事項のようにおおぞら号の令和7年度3月末、50年にわたる運行を終了、また40年間事業継続の伊豆潮風館も令和10年3月末で廃止との報告がありました。

私たちはこの報告をお聞きしたただびっくりしております。

埼玉県障害者施策推進協議会は、障害者に関わる埼玉県の施策を障害者団体、有識者で議論する埼玉県の審議委員会の性格を持っていることは言うまでもありません。

50年にわたるおおぞら号と伊豆潮風館の取り組みは、障害者の社会参加保養、研修などで大いに貢献を果たしてきている事業です。

現在もその役割は変わっておりません。

それが公の施設のあり方有識者会議、事業レビューでこの2つの事業を廃止すべきであると結論づけました。

障害者施策全般を議論する施策推進協議会において、議題にも取り上げられず、単に報告事項とされたことに強い憤りと不信感を持ち、障害者施策推進協議会の役割に大きな疑問を呈するものです。

このような施策決定には県、県民に対する透明性が確保されていません。

利用団体である障害者当事者の意見を聞かず、一方的に、施策を廃止することは納得できません。

社会のバリアフリー、心のバリアフリーはまだまだ道半ばで、この2つの事業は埼玉県の誇れる障害者施策ではないでしょうか。

またこの事業廃止に伴う代替案も何ら示されておられません。

この2つの事案は埼玉県障害者施策に関わる重要な施策であり埼玉県施策推進協議会において審議することを求めます。

その際この事業の果たしてきた役割を再認識するとともに、障害者の社会参加を保障し共生社会の実現を目指す埼玉県の基本姿勢を大切に、障害者当事者に寄り添った審議を望みます。

松本委員)

ありがとうございます。

事務局から今の万谷委員のご意見に関しまして何かございますでしょうか。

事務局)

まず今年度から委員になった方もいらっしゃいますので、経緯についてご説明をさせていただければと思います。

埼玉県では毎年、事業レビューということで、事業の見直し作業というものを各事業について行わせていただいております。

その中で全ての事業の見直しをするのですが、特に事業期間が長いものであったり、見直しを行う中で、有識者の意見を聞いた方がいいものなどは有識者会議での見直し対象として選定して、特に集中的な見直しを行うということになっています。

おおぞら号に関しましては、事業レビューの中で、50年たっている長い事業ということもありまして、今の社会情勢などと照らし、果たして県としては続けていくべきなのかということと、あとは実際には、色々なご意見があるかと思いますが、受託してもらっているバスの運行事業者からも運転手が令和8年度に大量退職するという話もありまして、受託自体が難しいというようなお話もいただいているということ、あとバス自体が、今年運行に供してから9年目になりますが、通常9年ぐらいで入れ替えをするというタイミングであるということもありまして、事業レビューの中で廃止せざるをえないという結論に達したところではあります。

また、伊豆潮風館に関しましては、事業期間が長いものであるということと、建物が古いということ、長期保全計画等を作って修繕をしていく必要があるのですが、その修繕費用と、今後そのまま維持管理していくことが県として可能かどうかという視点、それを維持管理しながらでも営業を続けていくべきなのかという点等を検討をした中で、有識者会議の提言として、廃止を検討すべきというご意見をいただいています。

有識者会議の提言を踏まえて、潮風館は指定管理期限が令和7年度末になりますので、通常だと次も5年間の指定管理の期間を設けて委託をするところ、2年で指定管理することとなっています。

この2年間のうちに、令和10年以降に大規模修繕を控えていることも含め、果たしてこのまま県として続けるべきか、廃止や、他の方法がないかという点も含め、検討するという結論となっています。

同様のお話を、今回6月の県議会にも報告しているところです。

障害者施策推進協議会には、6月6日に初めて今のお話をさせていただいているところではあるんですけども、有識者会議の提言自体が令和7年度3月末に示されたところもございまして、このタイミングとなりました。

また、皆様のご意見を聞かなかった、という点についてですが、有識者会議の仕組みとして、県の行財政部門が主催しています。

そこに大学の先生やシンクタンクの方達がメンバーとしていますが、その有識者の方々に対して、県庁職員が事業説明する場が設けられています。

その有識者会議において、当事者の方々、関係の方々からのご意見を聞く機会が設けられているかという点と今の仕組みの中ではありません。

これらのことから、皆様からのご意見を聞かない状況で、6月6日にご報告という形を取らせていただきました次第です。

次に、万谷委員からのご発言を受けて、県としてどのようにさせていただきたいか、という点について、ご説明させていただきたいと思います。

万谷委員のご意見をいただきまして、私ども事務局としてご提案させていただきたいのは、施策推進協議会の委員の皆様から、有志を募りワーキングABCチームとは別に、おおぞら号、伊豆潮風館に関して、委員の皆様からご意見をいただく別ワーキングを作らせていただくことについて提案させていただきたいと思っております。

既存のABCのワーキングチームにおいては、計画の見直しについて、かなりの時間を割いて議論をいただかなければいけないため、別のワーキングチームを提案させていただくものです。

具体的には近々に7月29日から8月8日金曜日のどこか1日2時間程度、会議室を押さえ、開催をさせていただきたいと思っております。

別ワーキングの座長についてですが、伊豆潮風館、おおぞら号はBチームの所掌、社会参加に関わる部分ですので、遅塚委員にお願いしたいと思っております。

現場での対面出席、Web出席を合わせて開催し、委員皆様でご協議をお願いできればと思っております。よろしくお願いいたします。

下重委員)

会議の出席者は、障害者施策推進協議会の委員の私たちだけか、他の団体もお呼びするのか、どのようなお考えですか。

事務局)

イメージとしては、あくまでこの施策推進協議会の別ワーキングということで考えておりますので、委員の皆様の中からご出席いただければと考えています。

人数制限は設けない予定です。

現地に来ることは難しい可能性もあると思っておりますので、Web参加、書面参加可能としたいと考えております。

下重委員)

団体のメンバーの意見を委員会に出してもいいですか。

事務局)

いただいた意見を下重委員のご意見という形で発表していただくことは可能です。

石橋委員)

伊豆潮風館の利用者数データ等を別ワーキングの際に御提示いただけますか。

事務局)

数字としてはご用意させていただきたいと思います。

白石委員)

この件についてはもう県でも十分把握されてるかと思いますが、今回、万谷委員から協議会に対しての要請がありましたように、6月6日に発表があった時点で各団体がすでに動き出しています。

私が所属する法人でも、この件については、県に要望していくということで理事会で動いておりますので、このような団体が増えてくると思います。

このことから別ワーキングという小規模では済まない事案ではないかと、私個人としても感じています。

伊豆潮風館とおおぞら号の取扱い、今後の計画等について別枠で設定をしないと各団体が各々で県に要望・対応を求めてもまとまらないと感じていますので、キャパシティを増やした方がいいかと。

当法人の会長も言っていますが、万谷委員も指摘されているように、障害者を抜きにして決定してるところに違和感がありますので、決定の経緯も含めてもう一度きちんと、伊豆潮風館、おおぞら号に関して別枠で何か開催した方がいいと考えております。

事務局)

いただきました御意見に関しては持ち帰らせていただきたいと思います。

実際、市町村レベルの障害者団体からもすでに要望をいただいているところではあります。

どうしても多くの団体の声を聴くのは難しいと思っております。

県としては、万谷委員からご発言いただいたこともありますので、附属機関である施策推進協議会の中でワーキングという形をとらせていただきたいと思います。

その中で、出席いただく各団体の代表の皆様に傘下の団体の方たちの声も吸い上げていただき、そのワーキングでご発言いただければ有難いです。

その中でご意見をいただき、県としても受け止めさせていただければと思っております。

白石委員)

それでは、ワーキングAチームではおおぞら号と潮風館は、検討の範疇には入らないということでよいでしょうか。

事務局)

Aチームでは検討いたしません。

白石委員)

わかりました。

関根委員)

私は、事務局からの提案が現実的だと思います。

先程の事務局からの説明で気になったのが、施策として古いから長いから、運転手不足だからといった理由がのべられましたが、本当はそこがポイントじゃなくて、どのぐらいおおぞら号や、伊豆潮風館が障害のある方々に貢献してきたか、その視点が抜けてしまっているの、そこに焦点を当てないと、堂々巡りになり、辞めようとなってしまうのではないかと。

その視点がないから、公の施設のあり方有識者会議が古いから、長くやっているから廃止と非常にシンプルな話になってしまうと思います。

私は、それは本質ではないと思っています。

先ほど石橋委員からお話がありました、どんなふうな実態になっているか、これを皆さんに語りながら、みんなもそう思っているのだというようなことを会全体を盛り上げてやるということかと思っています。

その反面、結果的に今、県の予算に限界があって、どのように優先順位をつけていくかということになると、この協議会の中でバランスを持って取り上げていくのは、実際は難しいと思っています。

結論としては、私は事務局提案の方法で、第一歩を進めていくのがいいのかと思います。

松本委員)

ありがとうございます。

それでは、別ワーキングを立ち上げる、その際には伊豆潮風館、おおぞら号の利用者データを含めて、情報をいただくということ。

もう1点、関根委員から話のあったように施策の意義や貢献度がどれほどだったか、といった点も含めた形で別ワーキングで検討していただくということで、チームの決定としてよろしいでしょうか。

《意義なし》

松本委員)

それでは事務局から改めてメールをいただければと思います。

事務局)

Bチームでは別ワーキング立ち上げの了解を得ておりますが、Cチームの開催がこれからですので、そこで了解が得られましたら日程調整させていただきます。

次第3 ワーキングチームの検討課題について

松本委員)

それでは、次の議題に入ります。

資料2-3をご覧ください。

昨年度のワーキングABCチームで洗い出された課題が資料2-3に載っています。

本資料から、検討を継続する課題を拾い出したり、或いはここに載ってはいないが新たな課題を検討したい、深めたいというのを考える時間が前半、後半が彩の国いろどりライブラリーのことということで、2部構成的イメージで進めていきます。

資料2-3ですが、Aチーム部分には障害理解や差別解消といった点が重点的に置かれています。

資料2-3、1ページ目では、障害理解、差別解消の推進ということで、バリアフリーハンドブックが使われていて、これを配るだけではなく、様々な使い方ができるといい、という意見がありました。

社会モデルの考え方を広げていく方がいいという意見についても、この障害理解及び差別解消の促進部分に入っております。

また、学校教育において、特に義務教育で障害理解の促進をした方がいいという意見や、障害と言っても身体障害だけではなく様々な障害があって、それぞれ特性が違うといった点について広められたらいいといった意見もありました。そういった障害理解、差別解消をどのように推進していくかというのが1つ目。

2ページ目では、福祉教育、或いは障害のある人となない人の交流機会、特に直接的な交流機会の中で理解を深めたり、差別解消に努めていくという方法論についてが記載されています。

さらに3番として権利擁護の推進ということで、3ページ目には成年後見制度が使い勝手が悪い、どうにかすべき、という点が書かれております。

4番は、権利行使の支援ということで、障害のある方がきちんと選挙に行けるのか、投票所に行けるのかという移動手段も含めて検討が必要ではないか、という点が書かれております。

6番がワーキングAチームと直接関係はありませんが、ヘルパー不足、ボランティアグループ不足という人材に関する問題。この点はAチームには一見関係ないように思えますが、理解促進や交流体験の中で、もう少しボランティアをやってみたいという方が増えていく等といった点で、関連があると思います。

また、タクシー会社の理解が進んでいないので、福祉タクシー券が使えない場合がある、という点が昨年度議論されたようです。

これは、タクシー会社の理解促進、福祉サービスをきちんと業者が理解できているのか、といった点で、広い意味でAチームの検討課題に入ってくると認識しています。

資料2-3について、私の方で概要を説明しましたが、ご意見がある方はいらっしゃいますか。

神月委員)

私は精神障害のある方の支援を中心にやっている埼精社協から施策推進協議会に出させていただいているんですが、やはり障害に対するご理解がないと思います。

まず不動産屋に行って、家を借りることが出来ない。本当に困っている方が家を借りることができないというのは本当によく聞く話です。

一度市に通報し、実際に不動産会社に対し、市から連絡を入れていただいたのですが、同社からは障害者差別解消法については十分承知している、同法を理解した上で対応しており障害者差別などは行っておりませんと、本当にしゃあしゃあと企業っぽい対応をされて、びっくりしました。

そのため、本当の意味での障害理解をどのように進めていくのかは、すごく難しいところだと考えています。

例えば、障害者差別解消法があることについては、確かに知っているのかもしれないですが、逆にそれをどうくぐり抜けていくかというような、違う浸透の仕方をしているのかなど。

住宅をどうやったら貸せるのかであったり、どういうことがあれば住宅所有者も安心して貸せるのかであるとか、そういう方向に話が行かないという点で、根本的な本当に障害のある方に対する理解がされないと、本当に解決していかないと思っております。

例えば心のバリアフリーハンドブック等様々な啓蒙啓発活動があると思いますが、そうしたハンドブックを見て、そういうことを言ってるんだ、というのは皆さん大体その時に思われるんだと思うのですが、それを現実の場面に置き換えて展開していかないということからも、やはり小さいときからの教育の大切さを感じます。

精神疾患の方は就労されてもなかなか一般就労先で障害の理解が得られず、孤立してしまったり、退職される方も非常に多いんですけれども、そういったことに対する理解促進は言葉上だけのものではない、こういうときにはこういう対応が必要だと、障害に詳しい支援者が企業等に入っていないといけないのかなと。そのような機会がないと難しいと思っていますので、文章や動画といったものではない、企業に向けての機会が県が主導できれば変わってくるのではないかと考えています。

松本委員)

ありがとうございます。すごく大事な視点ですね。

他の方いかがでしょうか。

白石委員)

今の意見は核心的なところだと思いますが、実質的な部分を理解していただくためにはどうするかというのが非常に重要なのかなと。

例えば、私も含めて多くの人は去年から合理的配慮が義務化されたことは分かっているけど合理的配慮とは具体的にどういうものなのか分からない。

先ほどの不動産屋さんのように、あれ知ってます、やっています、というところだけではなく、具体的にいうことが配慮になる、ということのをうまくアピールしないと、実質的な理解に繋がらないと思います、そこをポイントにしてもいいと感じております。

松本委員)

ありがとうございます。

実質的な部分を学ぶために、彩の国いろどりライブラリーがあるのに、と思いますよね。

実質的なところ、本当に具体的なところはここで聞けるのに、と思います。

白石委員の意見も含めて、彩の国いろどりライブラリーをうまく活用していけるといいなと思います。

下重委員)

障害者に対して賃貸住宅を紹介する事業があったかと思いますが何という事業でしたでしょうか。

事務局)

施策番号 18 です。冊子の 43 ページになります。

下重委員)

地域の障害者の人で一人暮らしをしたくて、色々な家を探すのですが、中々見つからな

いです。一回、入居したのに、うるさいから出ていけと言われたこともあります。

今、施設の人に家を探してもらっているのですが、理解がないことがあるし、バリアフリーハンドブックでは分からないことがあります。

私たちが実際に動く必要を感じています。私がスーパーマーケットで買い物をすると袋に入れてくれないので、入れてくださいと何度も言って、この人は袋に入れられないと思ってもらえて入れてくれるようになりました。このようになるまで実際に動かないとわからないのかなと思っています。

松本委員)

ありがとうございます。今のご意見は施策番号 18 含めて住宅の供給だけではなく、住み続けるための支援も必要ではないかという点、障害のある人自身が自らに必要なサポートを言いやすい環境、それを受けて周囲が気楽に気安くサポートを提供できる環境を、どのように埼玉県に作っていくか、という御意見でした。

ありがとうございました。

石橋委員)

資料 2-3 の中で、投票についてちょっとワーキングの中で議論したいと思っておりまして、例えば、自分はいつ寝てしまうか分からないという過眠症という難病当事者で、今も薬を飲んでなんとか外出しているところ、選挙に行こうと思っても、朝起きることが出来なかったら投票に行けない。本当に 15 時間とか 20 時間とか寝てしまうので。

あとは他の難病の方で車椅子の方がいて、そういう方々にとっては、投票所にはスロープが整備されていたりして環境は整ってきたと思うのですが、投票所に行くまでのサポートが薄いと思います。

その点をこのワーキングで深めていきたいと思っています。

関根委員)

企業の観点から言いますと、以前は儲かればいい、高い給料を出せばいいというのが企業のあり方だったのですが、このところ環境問題、SDGs 等、持続的社会に持っていこうですとか、男女の雇用といった点も留意されています。そういったことは今すでに取り組まれていて手法も分かっているのですが、残念ながら企業側からすると、共生社会の実現や、その中で、障害者とどうつき合っていくといいかというのは暗中模索の状態です。

障害者雇用の義務化の点で数字は出されているのですが、それは、ただの数字であって、実際どのようにやってるかという成功例とかモデルケースを共有すると、うちの企業でも出来るとなるかと。

もっと言いますと、以前、企業は利潤で評価していたのが、最近は利潤だけでなく世間にこのように貢献しているという部分に焦点が当たってきていますので、そういったところに持っていけるような取組をやりたい。

そのためには、成功例の共有、行政側からそういった成功事例に対する表彰を含めて、全体に行き渡るようにすれば、企業が前に進むことができると思っています。

松本委員)

ありがとうございます。

企業の社会貢献 CSR の観点ですね。今学生も給料がいいとか、そういった点で就職先を選ばず、その企業がどういう社会貢献をやっているかで就職先を選ぶ状況になっていま

す。

今、企業は社会貢献をしなかったら生きていけませんので、障害のある人が生きやすい社会を作るために、企業のノウハウをどういうふうに吸い上げ、どういうふうと一緒にやっていくかという点は私も関心があります。

私もファンドレイザー資格を持っていて、ファンドレイジングをやっているのですが、むしろ、これからはその分野を強化すると突破口が開けるような気がしています。

下重委員)

小さい時からともに学ぶのは当たり前だと思います。

私も甥っ子、姪っ子がいますが、生まれた時から一緒にいて、おばちゃんはこのような障害だから、お酒を飲む時は、おばちゃんはストローを使わないと飲めないよね、と言って、姪っ子、甥っ子がストローを持ってきてくれます。

そのような付き合いが出来ています。

私は言語障害があって、聞こえなくても、もう1回言ってと言ってくれるし、もう1回言おうと、こういう話だね、と確認もしてくれます。

お互いに分かり合うことが出来ていて、非常に有難いです。

松本委員)

ありがとうございます。

今のお話はさっき出た障害理解、差別解消をどのように進めていくかというお話とも繋がってくると思いますが、障害のある人を理解するっていうところは少し棲み分けながら、考えていきながら、その方法論の話しかと伺いました。

そのため、直接的な交流体験を日常の中で実施することが大事ということと、サッカー、ドッジボール、カレー作りといったような作られた交流体験、多分この2つの両方あるといいと思いますので、とにかく出会うということ、お互いに歩み寄って理解し合うことが大事ですね。

障害のある人が障害のない人を理解するっていう側面も非常に大事かと思います。

当学も障害のある学生がいますが、特別支援学校の中で育った子にとって障害のない人との関わり方を大学の中で一生懸命勉強し、社会に出ていくという交流の場になっていますので、互いに学べるといいと思って聞かせていただきました。

ありがとうございました。

石橋委員)

先程、下重委員がおっしゃっていた住宅の件ですが、難病患者も住宅に入れないということがあって、県営住宅に何回も応募しているが、入居させてもらえないという問題が起きているので住宅のことは重要なこと。

それも生活保護受けている人が入居できないという状況であるということを確認していききたいと思います。

白石委員)

もう1点興味があるのは難病で就職できないという話が良くありますが、難病理解を進めるため社員研修をして欲しいと意見しても、その社員研修する人材がいらないという問題です。

どの点をどのように配慮して欲しいというのは、難病当事者自身が一番分かっているこ

となので、研修講師等に難病当事者を派遣するという形にしないと、企業は実際のことは分からないと思います。

松本委員)

すごく大事な視点だと思いますので、皆さんで考えていけたらと思います。

住宅に関しましては先程、お話が出ましたが、アパートを貸してもらえない、精神障害を理由に無理ですとか、就職の場面でも、精神疾患があるからうちでは働けないといったことが普通に起きていますので、その点を払拭していけるような何かが出来るといいと思います。

先程、下重さんからの意見で、交流体験の場が効果的だというものがありました。

お互いの理解に効果的だという点と、学校・企業等への教育という点が非常に重要だということが前半の議論の中で共通理解を図れたと思いますが、その教育の手法として埼玉県には彩の国いろどりライブラリー事業があります。

ざっくり言うと「語り」です。

語り手を登録して、その語り手に何か語ってもらいたい人がアクセスしてきて、マッチングするという取組です。全国的に見てもこのような試みは実はあまりないので、この事業が振るっていないのは勿体ないと思っています。

繰り返しになりますが、白石委員もおっしゃってたとおり、体験した人の話が一番響くし、私なんか言うよりも体験した人がこういうことやって欲しいとか、こういうことについて困っているんだと言った方が伝わり方としては非常に強いので、この語りの場をコーディネートする彩の国いろどりライブラリーはすごく大事だと思います。

この事業について事務局から御紹介いただけますか。

事務局)

それでは説明をさせていただきます。

お手元の1枚ペーパー資料をご覧くださいと思います。

彩の国いろどりライブラリー事業は令和6年10月からスタートいたしました。

埼玉県のホームページで彩の国いろどりライブラリーのページを掲載しておりまして、身体障害のある講師を8名登録しております。

これはあったかウエルネットさん、DET 埼玉さんにもご紹介をお願いしたものです。

昨年令和6年10月から運用開始していますが、開始まで紆余曲折がありまして、簡単に経緯を御説明します。

令和2、3年には埼玉県で予算要求をし、県社協とも連携して、同会に事業委託する形を構想として描いていました。

この間、施策推進協議会の皆様から意見をいただき進めてきたところですが、財政当局を説得しきなかったこと、県社協にお力添えいただく調整ができなかったことから構想どおりに進められず、令和4、5年と元委員である佐藤陽先生、あったかウエルネット、DET 埼玉、県社協とも協議をしながら現在の形となり、令和6年10月に記者発表、スタートをして、今に至る、という状況になっております。

資料として彩の国いろどりライブラリー事業の概念図をお見せしていますが、現状この資料のような状況になっておりません。資料は、当初構想でこれを目指したかった、というものを表したものになっております。

本来は県社協が持っている地域福祉推進プラットフォームとも連携、埼玉県教育局とも連携し、市町村教育委員会にも案内が周知されていたりだとか、地域の学校、県民、障害

当事者団体とも連携し、障害理解を促進する、当事者の方と触れ合って当事者の方から生の声を聞いて、真の理解をつなげていこうという構想でいたのですが、今のところは図の通りにはなっていない状況でございます。

次に実績についてですが、相談自体は何件かいただいているのですが、実際に実施に至ったのが、今のところは1件になっております。

伊奈町立南中学校での総合的な学習の時間で1件の実績があります。

また、8月に1件実施予定ですが、日高市で開催予定です。

DET 埼玉の上野さんにご講演いただくことになっております。

今年度は、和光市社協でからもご相談がありましたが、講師の当てが他にできてしまったということで、実績に繋がらなかったところであります。

現状を分析すると、我々としても広報不足ではないかと考えておりまして、今後、県の教育局が指導主事の先生を集めた会議の場に出席しまして、彩の国いろどりライブラリー事業を周知しようと思っております。

あとは小中学校校長会という組織に声をかけ、全体会議に参加させてもらい、本事業を周知し、実績拡大を図っていきたいと思っております。

1点補足ですが、昨年度実績の伊奈町立南中学校について、同町社会福祉協議会に学校側からご相談があつて、同協議会の方から埼玉県の方で彩の国いろどりライブラリーというものが始まったようだから、県庁の方に相談してみたらどうですか？と促してもらい、実現に至ったものです。

市町村社会福祉協議会の方には、県社協からも周知していただいたというところがあったので、市町村社会福祉協議会は彩の国いろどりライブラリーという存在はうっすら知っていたいただいていたようです。

学校と社会福祉協議会の関係については、強い地域とそうではない地域があるのですが、社会福祉協議会ごとに例えばボランティア体験プログラム等をやっていて、積極的に関与していたりする地域は、学校の先生方も社会福祉協議会に相談しやすいようです。伊奈南中学校における実績は、その繋がりが機能して実現したものです。

社会福祉協議会等は既に彩の国いろどりライブラリーを知っていただいている分、うまく活用していただけるかなと思っておりますので、市町村教育委員会と社協を上手くつなげると小学校中学校にも広く浸透していくのではないかと考えています。

松本委員)

ありがとうございます。

拡大していききたい意向が県にもあるということですか。

事務局)

そうですね。

今年度になって教育委員会に働きかけを始めたり、市町村にも年度初めの事業説明会の中でいろどりライブラリーを活用いただきたいといった依頼させていただきました。

本事業を活用していただいて、登録講師も少しずつ増やして、差別解消や障害者理解といった点を小中学生の方たちに交流していただいてお話を聞いていただいて、体感として理解していただくというような機会に結びつけられればいいなと思っております。

松本委員)

ありがとうございます。

検討の方向性が幾つかあって。

1つはこのいろいろライブラリー事業そのものが持っている課題の洗い出し、登録講師は身体障害だけでなく、他の障害にも広げるべきだと私は思っているの、そこが1つ検討課題だと思っています。

2つ目は講師の教育。語りはともすると偏見や差別を助長します。

障害者ってやっぱり怖いよねと子供は平気で書きますから、そういう語りは絶対させないよう、講師もきちんと語りができるという体制にしないといけないと思っています。

もう1つは依頼を増やすための課題。そのためのルート確保ですよ。

先程大事なお話が出ましたが、学校は社協に依頼をします。車椅子体験をするから車椅子を貸してほしいと依頼をするのですが、気の利いた社協は、車椅子を貸さないでこういう取組があるけどやってみる？と促す。こういうルートが必要。

そうなるよう市町村社協の教育を県社協にやってもらう。県だけじゃなく、皆で依頼を増やすためのルートを確保していく。

関連しますが、依頼がきたときに実践につないでいくためのルート確保もありますよね。

問い合わせが来たけど、逃げている人達をどうやって捕まえてくるみたいな、そこは事業そのものの課題と先ほど言った依頼をふやすための課題と非常に密接な部分かと思います。

石橋委員)

前年度やっとの思いでスモールスタートをスローガンにしてスタートした記憶があります。今回やっど講師、依頼数を増やしていこうというという段階になったと思います。

なので、皆さんには例えば講師探してたよとか、この人講師に向いてるとか、当事者ならではのネットワークでそういう情報をここに持ってきて欲しいというのが1つあります。

後は、当事者が活躍できる場所でもあるので、くすぶってる当事者の人とか関わっていくのがいいと思っています。

関根委員)

交流が非常に重要という点ではいろいろライブラリーは本当にいい企画だと思っています。

ただ、今はどちらかというと運営側からの視点ばかりが見えていて、これを実際、聞く側の動機が強いのかどうかという点がないと、ニーズにこたえて、講師が派遣されるので難しいのかなという気がしています。

強引にやるのであれば、先程の義務教育の中のカリキュラムに強引に入れる。それから大学の単位に入れる。そうしたカリキュラムに講演を受けていろんな話を聞くというのを入れると、ある程度強制的に受講させられるのかなと。

それからもう1つ、共生社会を実現せねばならないという本当の意味の動機付けが弱いような気がしますので、それはこういうことだから、交流の機会が必要なんだよと、その点をプッシュしないとなかなかこの件は前に進まないのかなと思います。

あとは違った側面からの意見ですと、障害のある方々の生き方に感動を覚える、共感を覚えるといったことを求めるですとか、企業から見た側面ですと、そういった接触をして、お付き合いの仕方、様々なことを覚えるといった受ける側の動機づけ、ここに必要な

視点を入れないと、この件は前へ進まないと思います。

松本委員)

ありがとうございます。

いんどりライブラリーの対象は子供だけじゃないですね？

事務局)

子供だけではありません。

松本委員)

企業研修でやってもらったらいいですね。

事務局)

そういった需要も取り入れていかなければいけないと思っています。

企業においてもご理解いただけていない、といった内容で、当課に相談が入ったりとかもしますので、業界団体に働きかけをして、いんどりライブラリー事業を使ってもらって、直接障害当事者からお話をさせていただく、困りごとについて企業に理解をいただくというのは、それは関根委員がおっしゃる通り、聞く側に対して動機づけをするのは県の役割だと思っています。

先程、石橋委員がおっしゃったように、もともと、この彩の国いんどりライブラリーを作るとき、障害当事者の社会参加の場にもしたいというのが県の中でもありました。

本事業をうまく活用していけば、企業の皆様に障害者理解、合理的配慮を知っていただくというところにつなげられると思っているので、その点を考えたいと思います。

関根委員)

もう1点よろしいですか。先程本事業が進まない理由の1つに、予算がおりなかったとお話がありました。

この後の議論も予算取りを意識した方がいいと思います。予算がないと事業が進まないのです。

多分、予算を取ってその効果がどうなのか、その点がよく見えてない。

もっと具体的にこういう効果があるから、予算をこのように取得、執行すると見える形にしたら、この件も進むかなと。

松本委員)

学校の予算の組み方ですが、次年度分を今ぐらい、7,8月で決めています。

これからいんどりライブラリーの依頼が出てくるのかもしれないので、今が狙いどころかもしれません。

事務局)

そうですね。それもありまして、実際に校長先生方だけで運営してる校長会があるとお伺いしているので、そこにいんどりライブラリーを紹介しに行きたいと思っています。

松本委員)

ありがとうございます。

校長会への説明の仕方を一緒に練りましょう。

私がやっている NPO も 20 年ぐらい福祉教育をやっているのですが依頼がないです。

依頼数が少ないので、社協にお願いしていたりとか、校長会は毎年連絡しているのですがリアクションはありません。校長先生方に引っ掛かる言い方をしないと駄目なのだと思います。

語りがどれぐらい効果的で、どういうふうに子供を伸ばしていくのかという意義だとか、事業の仕組、概要を説明するよりも実際、子供たちはこう変わる、と説明した方がいいと思います。

校長会あてに事業説明をするのはすごく良いことだと思います。

万谷委員)

講師になれるのは手帳所持者だけですか？

事務局)

難病の方で手帳を取れない方もいらっしゃることは承知しています。

先程、働いている中で職場における理解が不足しているという話もあったかと思います。

難病の方達にも、こういうご苦労があって、こういう理解があれば、もっと働ける等そういう話があると思います。それは精神疾患の方たちももちろんそうだと思います。

生きやすさに繋がるという観点では、様々な障害のある方達にお話いただく場として使うことを今後考えていく必要があると思います。

万谷委員)

私は彩の国いろどりライブラリーのホームページを見ていないので分かっていないのですが、同じ身体障害者でも目、耳と様々な障害がありますよね。

講師の障害種別、こういう方々だという情報は載っているのでしょうか？

事務局)

講師のリストは講演実績含め、詳細にホームページに掲載しています。

実績がある方たちに対し、県として講師登録依頼を行いました。

松本委員)

そのリストはクリックしたときに一番初めに出てくる表がありますよね。

あの表が分かりにくいかもしれない。

何を語ってくれるのかが分からないです。

事務局)

そうですね。

御指摘の表は、お名前をクリックすると、各講師のページに遷移します。

松本委員)

個々の講師ページはカラーでとても良いですね。

伊奈町立南中学校の実施結果、感想文がもらえたら共有お願いします。

その他、御意見のある方はいますか。

神月委員)

今現在、精神障害の方の講師がいらっしゃらないようですが、例えば一般就労で精神障害の方を雇用するとなれば、必ずこういう講師を呼んで1回レクチャーを受けるといったことが出来れば、ある程度基礎的な理解が出来ると思うので、そういう仕組みができてくると、このいんどりライブラリーもものすごく活用されるのではないかと思います。

松本委員)

一昨日まで北海道に行っていたのですが、北海道のB型事業所で精神の方の語りを事業でやっております、その事業は採算が取れています。

その事業所には語り手が13名いますが、全員が全員、すごい語りができている。

小学校へ行くこともあります。北海道なので、遠くから依頼が来た場合、メンバーさんたちは飛行機で移動して、小学校で語って帰ってくる。

あと看護師養成校等にも行って語ってくるようです。

すごいのは語り手13名全員がきちんと語れる。

そういった先進的事例もあるので、そこから、皆で学んでもいいのかもしれないと思います。

神月委員)

うちの施設も近くの大学の看護学科にメンバーさんが毎年何人か行くのですが、やはり、いいお話をされます。

今までの自分の人生、病気になってから、こういうことで困っているとか、こういうものを失ってしまったと思っていたけど、今こういうところでこういうことをしているので、こういう人生を送っていますということを、それは堂々と語られるので、私自身、本当に毎回同じ話を聞いているのですが、毎回感動してしまいます。

本当に誰が聞いてもいいお話はいいお話だと思いますし、そういう機会があればうちのメンバーの活躍の場にもなっていくと思いますので。

その大学で講師として招かれて話したということも実績として認めてもらえるんですか。

事務局)

確認します。

松本委員)

その方々、講師として登録してもらえるといいですね。

行政のことだから難しいと思いますが、ホームレスの方の語りもすごくいいです。障害者じゃないですけどね。

その点がいんどりライブラリーの構造上の難しさであって、障害者だけの語りを聞きたいという学校もあれば、ホームレスの語りが今すごい流行ったり、あとハンセン病の方の語りとか水俣病の方の語りとか、結構流行ったりするので。その点についても聞いてみたい学校があると思います。

あと何か言い残したことがある方がいれば御意見を。

石橋委員

彩の国いろどりライブラリー事業の周知・啓発は企業には直接行っていないのですか。

事務局)

今はまだ出来ていません。

今後はやっていかなければいけないと思っているところではあります。

障害者差別の話になりますが、合理的配慮の提供という言葉だけが1人歩きしています。

そもそもこの言葉自体が理解されていない部分があるので、業界団体や、経済団体に働きかけをして、会員の皆さんにお話する機会を捉えていきたいと思っています。そういったところに、いろどりライブラリーを結びつけていければ、という思いはあります。

それこそ、当担当では福祉避難所も担当していますが、そういった場所での理解だったりとかっていうのも知ってもらって、何かあったときには障害のある方に声をかける等といったことに結びついていけばいいかなと。

障害当事者の方たちは結局聞いてもらわないと何が必要で何が必要じゃないか分からないと思います。

同じ障害手帳等級であって、同じ身体障害でも、何が必要かというのは、人それぞれだと思うので、それに気付いてもらえるようにしたいと思っています。

1人の方から聞いた話でも、他の障害のある方への合理的配慮について想像ができるようになってくるとも思いますので、そういったところに繋げていきたいと思っています。

松本委員)

大事ですね。

事務局)

やはり差別解消法なども、当担当は所管はしてるので、できればそういう横展開も今後は考えていかなければいけないと思っています。

松本委員)

県から市町村へこういう研修をやってっていうことは言えないんですか。

例えば市の中で、住民票を発行する市民課等色々な部局の職員を集めて研修をしてくださいと。

事務局)

地方自治法上、県と市町村は一応対等な自治体になっていますので、なかなか市町村の施策の中身までグリップしてやってくれということは言えない気はしますが、お願いは出来るかと。

松本委員)

提案はできますよね。

この事業を使うとこのようなことが学べる、という職員研修などについて。

事務局)

提案は可能です。

関根委員)

今日の会議の中で住宅を貸してもらえない、という話があったので、例えば不動産系の業者に最初は絞って当たってみるのはどうでしょうか。

社会貢献をしている企業を絞る。そこに最初は伝えてみる。

結果回り回って、私たち施策推進協議会委員が不動産の理解が深まることに繋がると思うので、私たちの中の困り事からいろどりライブラリー講演先を絞るのがいいと思います。

松本委員)

依頼を増やすための課題として業種別にやっていく感じですかね。

ありがとうございます。

そうしましたら、今日いろいろと御意見いただいて、皆さんの関心事や、問題意識を持っている点を洗い出し共有することにお時間を使わせていただきました。

次回以降の進め方に関しまして、事務局から御提案、御意見ありますか。

事務局)

基本的には今年度のこのワーキングは、回数を重ねるごとに課題を絞っていったりだとか、深めていったりっていうところもあるんですけども、最終的に提言案として、施策推進協議会本会議にかけて、これを盛り込む、盛り込まないとするのは、計画策定年度の9月協議会でかけています。

今回は令和8年9月の協議会に諮ることとなります。

そのため、今年度については、本日、広がり切らなかった部分もあると思いますので次回も引き続き広げるところは広げる。深めていただく部分は深めていただくということをやっていただくことになると思っております。

令和8年度提言に向けて、Aチームとしてはここだけは押さえておきたいっていうものを、皆様からいただいたご意見の中から絞り込んでいくのが、3回目ワーキングチームになるかと思います。

次回は、各ワーキンググループでの発言や、逆に他チームに対する意見とかも出てたりするので、それを共有させていただきます。

それを改めて見ていただいて、2回目のワーキングの中で、少しずつ皆さんの中で、どうしてもここだけは外せない、ここは深掘りしておきたいといった点を整理していただきたいと思います。

年度が変わりますと、本会議4回に対し、ワーキング2回だけになってしまうので、来年度1回目のワーキングチームにて最終的な提言としての形になってくると思います。

そのため、次回からのワーキングの中で進捗状況については、事務局側としても留意、意見させていただきながら、確認をしていきたいと思います。

松本委員)

ありがとうございます。

次回ワーキングが11月27日ということで間が空きますので、日々のお仕事なり、活動の中で、Aチームに関する課題等をメモしておいていただきながら、また持ち寄っていただいて共有して、深めるところは深めていくっていう形で進めていくこととしたいと思います。

事務局)

ちなみに、資料 2-3 の中で、B チーム C チームからの意見でも後ろに括弧が書いてあるところは、そちらのチームの中から他チームに関するご発言があった場合に、(A) とか (C) とか、参考に書かせていただいているので、(A) と書かれてるところはさらっと読んでおいていただけるといいかと思います。

松本委員)

ありがとうございます。

では事務局にお返しします。

事務局)

以上でワーキングチームを終了いたします。本日はありがとうございました。